

相互行為からみた幼児の好奇心と向上心について

浅野 弘 光

文化創造学部幼児文化専攻

(2005年9月8日受理)

Investigation on the curiosity and Motivation of Interacting Infants

Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

ASANO Hiromitsu

(Received September 8, 2005)

現代の幼児児童は、「社会化」の面で未熟なところが多いと言われる。常識的にみても言葉の豊かさ、活動量の減少、生活規範の低下、仲間との関わりの縮小、無気力な幼児児童の増加など社会化にかかわる要件が未発達の傾向にある。このことは、幼児の社会化に関わる生育過程に異変が起きているのではないかと疑わせるところがある。即ち、社会化へ向かわせる重要な要件である相互行為を育む十分な環境が、整えられていないのではないかと考え、追及することにした。その際、最も顕著に現れる幼児時代の好奇心や向上心に、17年度はスポットを当て、幼児を取り囲む相互行為のあり方に保護者との関係を強く見つめながら警句を発したいと考えた。

特に「基礎・基本の発達曲線(1999年提案)」の補正を意識し、相互行為の関係図、好奇心や向上心に関わる事例を核にしなが、6～8才までの幼児教育の大切さを体験的な視点から強調したい。

1. 基本資料について

この調査の基本資料は、K子とN子の姉妹である。二人の成長を見つめながら、そこに見られる社会的相互行為を、好奇心と向上心に絞って追究し、基本資料にすることにした。また、基本資料に加える資料として、筆者の40年にわたる初等教育の経験を生かし、0才から8才までの一般的な実態を重ね合わせ(K市公立幼稚園小学校)、他の幼児児童の実態にも当てはまるように、K子とN子の事例を一般論に近づけるように配慮した。

. K子とN子の環境

K子は長女で、父母とも25才のときの子どもである。K子の生まれた時期は「母親(T)が家庭にいてこそ、子どもの心や能力が育つ」という父親(M)の信念で2DKの賃貸アパートから始まった。(父親の少ない給料に見合う信念に基づくささやかな生活だったと考えられる)

1年半後、妹N子が生まれたが、その時期にはMの親、Tの親の支援で、一つ一つの部屋は狭いが2階建て5DKの自宅に転居していた。妻Tも週2回程度外で働くようになっていた。(子ども達を妻Tの実家に預け、仕事は実家の手伝いをした)

・父親 M の信念

幼稚園に園の目標があるように父親 M は、家訓の働きを信じていた。M の祖父に当たる元 G 大教授が常々「根性があるかないかが人生を価値づける」と言っていたのに影響されたに違いない。こうした環境の中で M は、「環境と十分に関わりあえる人間の出発点は、親を、他人を信頼できるかどうかが基本である」と考え、この信頼関係を育てるのが母親であり、その脇役が父親であると考えていた。そのため M の余暇のほとんどは K 子のために使われ、まるで K 子の生活を先取りするかのように本・おもちゃ・遊び・運動と熱心にかかわり、母 T が脇役であるかのように見えた。(後年、M は、幼児から小学校までの子ども時代に、M の父親と遊んだ記憶がない。この体験の反動が私の子育てになったと言っている)

残念なことに近くに年齢の近い子どもがいなかったため、遊びの質や言葉は豊かであったが、うち弁慶の傾向が K 子に強かった。妹 N 子が生まれてからは、N 子を母親、K 子を父親と分担して、より子どもとの接触を多くし「素朴な根性の育成」をめざして、K 子と N 子が育てられた。

2. K 子の人間関係と好奇心

先ほどから述べているように K 子は1年半の間、父母の愛と大人ペースの環境で育てられた。そのため思考の発達は目覚しく、比較やものを分けるなどの思考形態が単語で話せる年齢から始まった。

事例 1, チイチャイ, チイチャイ

K 子は、2DK の賃貸アパートから生活を始めた。K 子の母方の家も、父方の家も広く大きく家の中を自由に歩き回ることができた。しかし、アパートは一部屋が狭いため、

歩行器で走り出すと直ぐ家具にぶつかり、壁に突き当たった。

K 子は祖父母が来ると「チイチャイ, チイチャイ」を連発した。祖父母の家と比較したわけではないが、直感的に出た言葉であろう。祖父母は、この言葉を K 子の訴えと捉えた。しばらくすると、「チイチャイ」は、比較する思考へ発達していき、

・おかちゅ(菓子)チイチャイ

・おぷろ(風呂)チイチャイ

などと、両親の菓子や祖父母の家の風呂と比較し、チイチャイの言葉を通して、他人との関わりを濃くしていった。

比較したものは、次のようなものである。

- | |
|------------|
| K 子の食べるお菓子 |
| K 子の使うスプーン |
| K 子の履く靴 |
| K 子の帽子 |
| K 子のベビー用椅子 |
| 隣の赤ちゃん |
| 隣の猫 |

1 歳 1 カ月ごろ

比較は、自分の身近なものから僅かではあるが自分から離れたものに移っていった。同心円拡大である。それは、隣の赤ちゃん、猫というように「他との関わり」の中で確実な言葉に育っていった。

このことを端的に述べるならば、「小さい」という比較する方法を根底にした拡散好奇心となり、人間関係ばかりか物や事象にまで広げていったと考えることができる。即ち、チイチャイの言葉が人間関係を広げる成功感を生み、次のかかわりを求めての行為に発展していく内的発動を促したとも考えられる。

事例2「あっ海、小さい」

1歳半になると言葉がかなり長いセンテンスになっていった。

K子はG市の祖父母が大好きで父親につれられて、よく遊びに来た。この頃には、「小さい」の反対が「大きい」という言葉を覚え、明らかに比較していると感じられることが多くなった。

8月のお盆でG市のどぶ川も綺麗な流れを取り戻していた。

「じいじの海、小さい、Kの海大きい」とどぶ川を見てK子が叫んだ。まるで大発見のように「じいじの海、小さい小さい」を繰り返して、「舟いない」と言った。海が小さいと感じる好奇心は、「海、いこ、海いこ（行く）と父親を引っ張る行動となった。

K子の家の近くには伊勢湾が広がり、海は、K子の生活圏内にあった。その上、母方のK子の祖父は、網本で「海苔」の生産者であり、K子を乗せる舟を持っていた。

そのK子の目に映ったのがG市の悪水を集めて市南部の中央を流れていくどぶ川であった。どぶ川は、伊勢湾に比較してあまりにも小さく、舟などなかった。

これが「あっ海、小さい」の言葉である。父親Mは、「川と関わらせることが海と川を区別する鍵になる」と考え、咄嗟にどぶ川の水をK子になめさせた。汚く臭い水であったが、お盆のため、近くのメッキ工場が操業を休んでいるので危険でない判断したためである。

K子「からくない。じいじの海からくない」
M「じいじの海、からくないね。これカワ(川)というの」

K子「じいじのカワ、からくないね、じいじのカワからくない、からくない」と、鼻歌になった。K子のカワに対する疑問と好奇心は、「なめる」という体験で満足に達した。満足

は、田の小川、用水路を指さして「小さい川」と学びを広げていった。

即ち、海と川を分ける理解は、一つの進歩とりなり、向上心へと発展していったのである。

3. 相互行為の意味

今まで、相互行為について、その意味を説明しないまま事例1,2を取り上げてきたが、事例の中にある相互行為について再度見直してみたい。

まずK子を取り囲む両親MとT、そして両親の両祖父母、妹N子が最も身近な社会である。社会は、人間が複数以上いる状況を社会とした場合を指している。その社会の中で「互いに、相手から働きかけられた内容に影響されて行為を繰り返す(同じ行為の繰り返しとは限らない)相手が自分に何らかの働きかけをする、その内容に影響を与える意図で相手に働きかけをする」という行為の交換が相互行為である。(門脇厚司著、子供の社会力 岩波新書より抜粋)

過去にアナライザー信号の信号交換を端的に表す言葉として「行って、返って、また、行って」のモードが使われたがこのような信号の行き来ではなく、相互行為は、お互いに影響を与え合う行為の交換である。

この定義を事例に当てはめると次の3つになる。

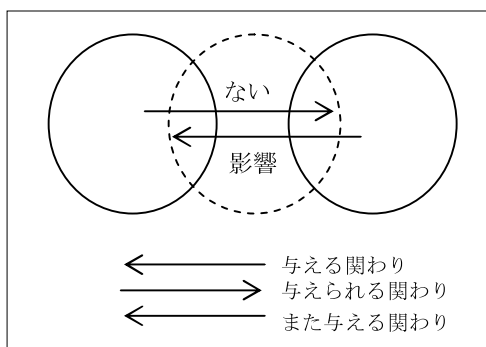


図1 相互行為の模式図2005 Asano

- ・アパートの狭さを「チイチャイ」と表現するK子の言葉(行為)が父親に影響を与え、一戸建てにする。幼児のチイチャイの言葉が関わりあう人々に影響し、行動を促すことになった。結果としてK子は、小さいと対比する「大きい」の意識をもつ。(相互行為の拡大)
- ・父とK子の共有する海のコナセが、父親のどぶ川の水をなめさせる行為に影響され、親子共有の概念が拡大し、関わりを大きくした。
- ・カワとウミを区別することで、カワに対する特別な関心(好奇心)が生まれ、他のカワを探る行為に移る。

の場合、K子の「チイチャイ」の言葉は、本能的ともいえる言葉であるが、(意図的に言葉を選択して言った言葉ではない)一種の訴えであり、働きかけである。したがって、その影響を受けた父親Mが周囲の人たちの支援を受け、一戸建ての大きな部屋のある家を建てた。ここで大切なのは、幼児の言葉を、相互行為といってよいかである。

一般に言葉は、社会の人々が共有する「関わりの道具」である。しかし、幼児は、その共有する道具を使いこなせない。(寡黙な人が相互行為の割合を低くする例がある)事例の場合、「チイチャイ、チイチャイ」という単語の繰り返して影響を与え、K子が人を動かし、結果としてK子も影響が与えられた。乳児が泣いたり、身体をバタバタさせるのも、「自分の行為が相手の行為に影響を与え、相手がだっこしたりする行為に出る」のも、相互行為の一つということになる。では、この場合は、どのような相互行為であろうか。

には、父とK子に「海」という共有する概念があった。幼児K子の概念

と父とは意味するものが異なってはいないが、現実にK子の近くにある海のイメージが共有されていたのである。

K子のイメージは、広々とした海水であった。(これをイメージの一部共有化と呼びたい)イメージの差を、このままにしておいたら、海のコナセのまま川という言葉を感じるようになる。相互行為は相手の意図に影響を与えることも含まれているので、K子に川の水をなめさせるという(媒体とした)行為の交換は、親子の概念の共有化を拡大したことになる。

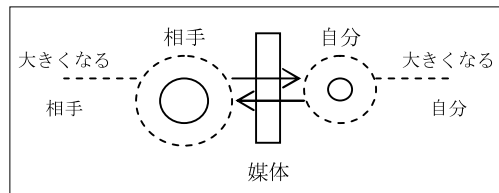


図2 媒体となる行為(言葉、物、感情、行動等) 2005, Asano

の場合は、相互行為にあたるのであろうか。幼児が相互行為によって社会事象の意味を拡大すると、拡散好奇心は、特殊好奇心となって、意欲・行動を前向きにすることがある。ウミとカワの区別がつくことで、興味関心がカワに移り、川を探して歩く行為(人間の意志的動作)に広がったのである。

しかも、カワを知った満足感は、次のカワを探して、その発見によって再び満足感を味合おうという意欲に繋がっていったのである。(向上心)

以上を相互行為の特色とすると、次のようにまとめられる。

- ・ 幼児の言葉は、相互行為を促す大きな要素である。
- ・ 言葉や行動の共有化は、(乳児の泣き声も含む)行為の発展や行為の交換となって表れる。(現れる)

- ・相互行為は、媒体となるものによって促進し、拡大し、発展する。

4. 相互行為発展の障害

事例1, 2からみるとK子は、順調に育っているように見えるが、両親、両祖父母、妹、以外とは人間的関わりを避ける傾向があった。本来、相互行為が限定された二人以上の人間間で起こる現象だとすると、K子の相互行為には、偏りがあることになる。

先の「1基本資料についての 父親Mの信念」でK子に内弁慶の傾向があると述べた。また、父Mは、「K子の生活を先取りするかのように玩具、本、遊び、運動と熱心に関わり」と、述べた。これだけが原因ではないが、K子の相互行為は、家庭から近所までが限界であった。その傾向は、3才になり、保育園に行き出すと一層、激しくなり、主体的、自治的に遊びはするが友達と接触したがないのである。(時間をかけて相手に安心感がもてると積極的になった)

直ぐ下に妹がおり、母親の力が妹にいくため、自己のテリトリーを守ろうとする防御の態度からも知れない。一般には「赤ちゃん返り」で大人に甘え、保育園の場合、保育士を独り占めにしようとする傾向が目立つが、K子は、安定し、信頼できる環境から外へ出ることを嫌った。

事例3, 独り占め

4才のときである。都合で妹N子が祖母に預けられ、家の両親とK子だけになった。そのとき、K子はご満悦で、「おとうさんとおかあさんを一人じめ、ハッハッハ、独り占めは、うれしいね」と歌った。

大人の言葉をまじえ、大人の仕方を真似、(父親流)お互いに交流し合うよりは、支配的であり攻撃的な傾向のK子であった。にもかかわらず、会ったことのない人や体験し

たことのない活動には、消極的であり、恥ずかしがる態度を示した。(見慣れないものを回避する態度)

「何でもできる自信が心にわくまで、一歩下がって友だちを観ている」態度がみられた。この態度は、第三者から・恥ずかしがりや、内向的な子ども、甘えんぼ、消極的な子ども、勇気が無い子どもと受け取られていた。そして「こんなにいろいろなことが出来るのに、どうしてなのか」と、尋ねられるのが普通であった。

この要因を「子どもの生活を先取りする父親の過剰な熱意だ」と判断し、過保護、過干渉といえば結論づくように考えられる。しかし、社会性の発達に影響を及ぼす要因が親の子どもに対する養育態度だけにあるとすれば、子どもの相互行為の発展の一つの障害が家庭環境だけがあることになり、大きな問題である。そこで相互行為の障害になる要因を挙げてみた。

- ・対人的な接触は適切か
- ・快適感のある生活の累積になっているか
- ・快、不快の適度な経験があったか
- ・子どもの環境が子どもの成長以上に整備され過ぎていないか
- ・失敗の体験が多くあったか
- ・子どもの遊びに制限を加えることがなかったか
- ・家族が子どもに接するとき、専制的になってはいないか
- ・積極的に社会的経験を行う機会や場を設けたか

～ は、相互行為の発展に障害になるとみられる要因を羅列したが、Mの家庭環境をみると(環境は生活を創り出しているものを取り巻いている外界と定義)適切でない要因に、
、
、
、
が上げられた。したがって、K子は、「
の快適感のある生活」が

自分で作り出せないと判断すると、後退の態度をとるものと考えられた。即ち、満足感が次の満足感を生み出す継続的な行為の保障で(失敗を避ける家族)自らの自信をつけてきたK子にとって、自分で見通しのつかない行為には、後ろ向きになったのである。

末尾の「基礎、基本の発達曲線(2004一部修正)から考えると、基本の力として大きな課題をK子は抱えたことになる。

人間関係の狭さや社会参加の消極性は、好奇心や向上心を阻害する可能性があると考えられるからである。

K子は現在3年生になるが、新しい仲間、新しい学習、新しい環境に慣れるまで時間がかかる。しかし、慣れると好奇心旺盛になり、追求的になり、強い向上心をもつ子どもに変身するタイプである。

5. 苦しみの中で育つ相互行為

相互行為が出来ても、その範囲が狭いと好奇心や向上心の発展が弱まることをK子の事例で考察してきた。(今後この状況を社会性の縮小と呼びたい)

妹N子は、姉と一才半の違いで生まれた。妹が生まれて「赤ちゃん返り」に近い状態になったK子が両方の祖父母や両親の支援によって立ち直ったのは、二年後の3才半のときであった。

この間、N子は、K子から泣かされ、意地悪され、叩かれもした。過保護ほどに育てられたK子にとっては、信頼する両親、とりわけ父親の愛を奪われる気持ちであったのであろう。

一方N子は、2才~3才と育つに従い、小さいながら姉を立てることを覚え、次の言葉を多く口にした。

- ・お姉ちゃんのやね
- ・お姉ちゃんが先

・お姉ちゃん、ありがとう

・お姉ちゃんの好きなほうでいい

小さいときから人との関わりを十分自覚していった。特に「苦しいと感じる中での相互行為」に慣れていった。この苦しみを支えたのが、1, 基本資料のところの終わりに述べた「N子と母親, K子と父親」という夫婦による分担接触である。

N子は、我慢できなくなると母Tに抱きついた。訳は言わなかった。母親Tも訳を聞くことがなく、ただ抱きしめた。抱きしめられて2分もすると、再びK子に近づき、何事もなかったように遊び始めた。

4才ごろになると姉の衣類を喜んで着た。何でも姉の真似をした。

- ・姉(K子)がピアノを始めれば直ぐ自分も始めた,
- ・姉が文字を覚えれば、見ていて直ぐ覚えた
- ・姉が数を覚えれば、聞いていて直ぐ真似をした
- ・姉がホークから箆に替えれば直ぐホークをやめた

そして、姉以外の友達を求めて公園に行きたがった。N子と人との関わりは、姉から他人中でも同年齢の子どもに接近していった。他の子どもと関われば影響が大きく、まさに「虚構の中に生きる子ども」とでも言えるように、遊びに遊んで育っていった。

家庭文化の枠(同心円拡大説による)を3才ころには、完全に乗り越えていた。見るもの、聞くもの、触るものが全て好奇心を起こす対象であり、姉に負けまいとする向上心に向かっていた。

事例4, くるくるスパゲッティ

父Mの誕生日に子ども達の希望で「手作りハンバーグレストラン」に行った。(祖父母もついていった。)入るとN子は、キョロキョロと周囲を見回した。隣のテーブルでスパゲッティを食べていた女性の手元をじっと眺めていた。

そして「わたしくるくるがいい」といった。姉K子が「ここのお得意は、ハンバーグ」と言ったが、もう、机に備えられていたホークをくるくる回した。

「おばあさん、くるくるにしなよ。おもしろいよ。おかあさんもしなよ」と誘いをかけてきた。K子のいうようにハンバーグを食べにきたので、みんなはニコニコと笑っていた。

しかし、N子担当の母親Tは、ミートスパゲッティにし、N子を満足させた。

母親Tのホークとスプーンの手さばきは見事であった。はじめてスパゲッティをホークに巻くN子は大奮闘、ソースは、隣に飛び、スプーンは落ちて困ったが、母親を手本にして根気よく続けた。お皿のスパゲッティのなくなるころ、スパゲッティは見事にホークにくるくると巻きつき、口を汚さないで食べられるようになった。姉K子は浮かぬ顔つきであった。

「おじいちゃん、今度、Nとくるくる食べようね」と言った。

ますます、K子は、静かになった。

その晩のことである。

K子が紐をスパゲッティの長さに切ってホークに巻きつける練習をしていた。

この差は、好奇心や向上心の差か、それとも自由奔放なN子の育ち、即ち、姉から離れようとする気持ちか、生活範囲を広げ、何

にでも好奇心をもち、好奇心を自分の努力で解決していこうとする(これを素朴な根性として18年度のテーマにしたい)妹の自立心、向上心であろうか。

夜に内緒で練習する姉K子には、屈辱感があったに違いない。しかし、次にレストランへ行ったとき、澄ましてスパゲッティを頼むK子とN子の姿を思うと、姉妹の相互行為の効果を確認した気持ちであった。苦しみは、好奇心と向上心を広げると言っても差し支えない。

6. 無関心と相互行為

このように書くと、N子は良い子のように読めるが、「自分に興味関心がない」とちらっとみただけで、無関心を装う傾向がある。それは、無気力ではない。多少の関心はあるが、アクションを起こすまでもないと無意識に感じ取るのであろう。

特に姉K子にはそうである。

しかし、この傾向は、一端、家から外にでると、何にでも好奇心を見せる。負けまいとする。向上心に溢れる。拡散好奇心のかたまりのようである。しかも、一つのことを追い詰めていく根性(特殊好奇心)にも長けている。では、なぜ、無関心さを装うのであろうか。

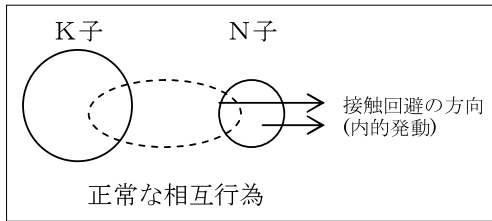
K子とN子間の相互行為に何らかの障壁があるのではないかと考えている。

- ・ K子との遊びが面白くない

- ・ 知的発達のずれが遊びの楽しみを阻害している

- ・ 姉の権威的重みが遊びを拘束するなどが考えられるが、姉妹関係としては望ましいことでない。これが発展すると、人権意識にも関わる大切なことである。

この関係を「事例4」を使って模式にしたのが次の図である。



N子は、ハンバーグのタレで口を汚す割合が多く、K子に注意される。この構図は、あらゆるところで生じた。そのため、ハンバーグをやめたのは、無意識のうちにK子の世界を回避し、自分の世界を構築させるためであった。「くるくるスパゲッティ」は、自分の環境を創り出す内的発動機だったと考えられる。N子の場合の無関心の装いは、社会性の拡大に繋がっていたと考えられる。

7. 相互行為の中の好奇心と向上心

向上心については、事例の中で度々触れてきたが改めて定義しておきたい。「向上心は、相互行為の中で自分の有為性を発揮しようとする傾向」としたい。特に有為性としたのは、その傾向の育ちによって、目的達成の可能性が大きいからである。

好奇心と向上心は、切っても切れない関係にある。

事例5, オレンジアイス

K子が1年生、N子は5才の夏、祖父母(M)の実家でアイスケーキが食べたいとK、Nが言い出した。祖父は、「機械を使わないでアイスケーキを作ろうと」提案した。KもNも大賛成であり、教えられた通り、試験管に入れられた砂糖水をボールに入れボールの水に塩を飽和状態になるまで入れた。二人ともおいしいアイスケーキを作り上げた。

終わった途端にK子(姉)がもう一度アイスケーキを作ると言い出した。すぐさまN子(妹)が「同じじゃ面白くないので、わたしはオレンジアイスを作る」と言い出し、冷

蔵庫に走った。

K子は、じろりとN子を見て「上手に固まらないと思うよ」と言った。それがN子の向上心を刺激したのであろうか。年上のK子に何かと負けているN子は、このアイスづくりでK子に有為性を示そうとしたのであろう。この時点では、K子に対する競争心が先行していた。また、K子にとっては、アイスができる可能性が高いため、N子に対して確かな有為性を持っていた。そこでK子は試験管の中に箸を入れ、市販のアイスケーキに似せようとした。N子は姉K子に負けまいと最初は懸命であったが、途中から自分の世界に入り、アイスケーキができるかできないかの好奇心に引きずられるように熱中していった。しかも3本作り始めた。自分と祖父母のものであった。N子の願いは、祖父母に食べさせようとする気持ちが先行した。N子には、二つの有為性があった。一つは、オレンジアイスケーキであり、二つ目は、祖父母へのサービスであった。

K子のアイスケーキは、前回の実験通り、成功した。そして、箸にまつわり付いたアイスケーキを食べながらN子を見つめた。反対にN子のは、なかなか固まらなかった。焦って試験管を触るので余計に凝固しなかった。今にもK子に対する有為性が崩壊しようとしたとき、N子は、試験管のジュウスを捨てると、はじめからやり直し始めた。もう、K子のことは頭になかった。祖父母のことも忘れていた。「固まるか固まらないか」への好奇心がN子の向上心を支えていた。これが特殊好奇心の状態であろう。

8. 向上心と相互行為

上の事例で「アイスケーキづくり」という素晴らしい相互行為関係が競争という強い感情で始まり、特殊好奇心へと発展した。残念

ながらN子のアイスづくりを祖父母が手伝った関係でK子とN子のその後の相互関係がどうなったか分からないが、強い好奇心が向上心を生み出す場合(N子)と、好奇心が成功感(満足感)を生み出す場合(K子)とがあることが分かってきた。

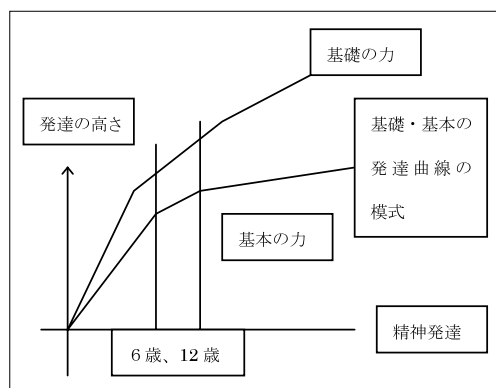
その上、次のことが言える

「相互行為に関わる範囲を広げる行動力をもつ子どもは、新しい挑戦に挑む割合が高い。相互行為に関わる範囲が広められない子どもは、比較的堅実な行動力をもつ」ということである。

このことは、K子、N子に限らず言えることであろう。

9. 基礎・基本の発達曲線

「4. 相互行為発展の障害」で触れた「生活世界の狭さ」や「消極的姿勢」「用心深さ」は基本の発達(基礎・基本の発達曲線)と、どのような関係にあるのであろうか。基本の発達曲線は、6歳までにほぼ発達し、12歳ごろから成熟を始める。これに対し、基礎の力(学力的な力)は、生涯にわたって発達を続ける。これは、一般的傾向であるがK子の生活世界の狭さ・消極的姿勢・用心深さは、3才までに形成されたと考えることができる。



基礎・基本の発達曲線

この時期の父親Mの「生活先取りの保護」とでも言うべき、K子への生活支援が「成功感」や「満足感」に満ちている生活を体得させたと考えられる。この期間は妹N子が自立していなく、父母を独占できる環境にあったため、生活先取りの保護が心の基本的発達を逆に弱めたものではないかと考えている。これに対し、生まれた瞬間からK子との競争、いじめに対抗してきたN子は、K子との相互行為を通して、接近と回避を繰り返し、自立し、即座に判断できる子どもに成長した。しかし、逆に「競争心」の強い子どもになった。また、父母も「自己の子育て」を反省し、生活先取りの保護をやめたこともN子の3才までの生活に大きく影響したと考えられる。

すでにK子は、3年生になっており基本の力の成熟も緩やかになっているが、近頃基礎としての知識理解が、K子の生活の狭さを知的に補う傾向が出てきている。例えば、地図を広げて「三重県はここでしょ。インドネシアはとても暑いというが本当かな」などの疑問をもち図書館で生活圏を広げようとしている。祖父母や親戚に手紙を出し、手紙の内容に「季節の違い」を見出そうとしている。

それは、物知り独特の自慢ではなく、知的生活圏の広がりのようにみえる。いつ自らの行動に積極性が加わるか楽しみである。

一方、一年生のN子は、友達いっぱいの中で遊ぶのに忙しい生活である。すでに生活の範囲は、T小学校の校区全体に広がり、誰のうかがどこにあるかも知っている。競争心は「あの子と走れば負けるがあとは負けない」などと、割り切る傾向もできている。しかし、こつこつと励む態度は不足で「レストランのメニュー遊びはするが手紙は書かない」という具合である。明らかに3才までの育ちの差を見つけることができる。基礎基本

の発達曲線の一般性を問うには、まだ不十分であるが、K子とN子の育ちの差が、基礎の力との相互補完や相互行為の拡大にともなう好奇心・向上心の発達と、どのように関係するか今後探っていきたい。

10. 事例的研究の限界と特色

今までK子とN子の事例を特に大切にしながら記述を進めてきたが、これが一般的な子どもの世界に適用できるかについては、疑問が残る。それは事例の特殊性の問題でなく、個の生得的な要素を含む部分を払拭できないからである。ここに、この研究の限界と特色があると考えている。

今後、K子とN子の成長を追いつつ、如何にして多くのデータを集めるかに専念し

たい。その視点は「素朴な根性の育成」とでも呼んでおきたい。

参考資料

- 「子どもの力」門脇厚司 岩波新書
- 「知的好奇心」波多野誼余夫 中公新書
- 「科学的思考の発達を考察する」浅野弘光
岐阜女子大学文化情報センター Vol NO 2
- 「適応の条件」中根千枝 講談社現代新書
- 「カンの構造」中山正和 中公新書
- 「わかるとは何か」長尾 真 岩波新書
- 「無気力の心理学」波多野誼余夫他 中公新書
- 「幼児教育と脳」澤口俊之 文芸春秋

注 相互行為を、interaction とした